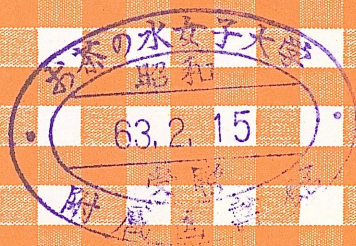


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

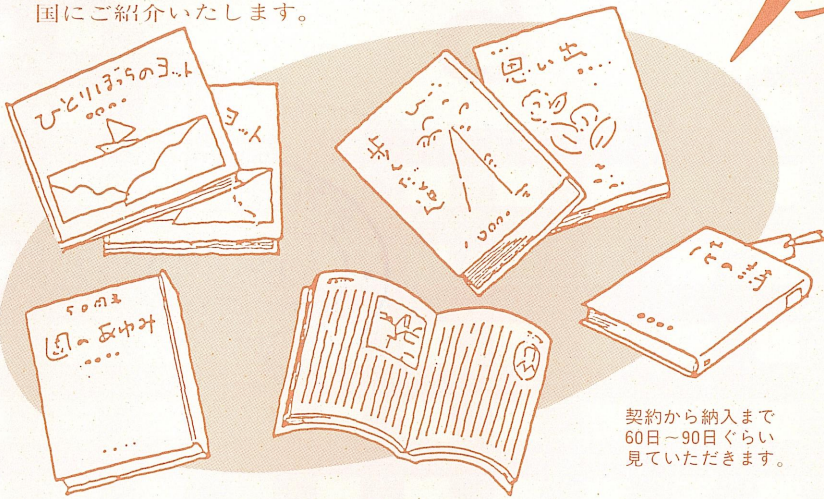
1987 **5**



自費出版のご案内

手間のかかる作業は、お手伝いいたします。

- 内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。●お気軽にご相談ください。
- 完成したご本については、小社の宣伝ルートを通して全国にご紹介いたします。



契約から納入まで
60日～90日ぐらい
見ていただけます。

記念の本づくりを、なさいませんか。

- *****
- | | | | |
|----------------|---------------------------------------|---|---|
| 1. 本の内容は | 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。 | 上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。 | |
| 2. 製作部数は | 1,000部以上がお得です。 | | |
| 3. 製作期間は | 原稿頂戴から完成まで、約3か月見てください。 | 5. 本文は | 原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。 |
| 4. 本の大きさや体裁は…… | 大きさはB6判、B5判、A5判など。製本は、 | 6. 絵や写真は | もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。 |
- *****

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレール館

記念の本づくり係 〒101 東京都千代田区神田小川町3-1
TEL 03-292-7788

(ご連絡はお近くの小社代理店・事業所どうぞ)

幼児の教育



第八十六卷

第五号

幼児の教育目次

——第八十六卷 五月号——

© 1987
日本幼稚園協会

「幼稚園真諦」を読む その二

——「幼稚園教育の在り方」と対応させて……………津守 真…(4)

SF的読み解き 子どもという風景

第二十五回 異世界からの通信……………堀内 守…(16)

自然とのふれあい(その五)……………斎藤 芳子…(26)



迷いどき(1).....向山 陽子...(32)

兔園隨筆

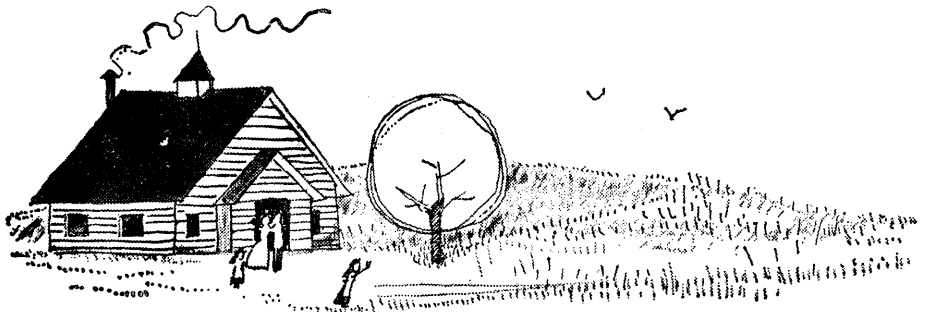
出会い(その五).....燕木 寿江...(39)

自分のものへのこだわり.....牛山佐智恵...(45)

附幼村どぜう騒動記.....永倉みゆき...(49)

若いお母さんたちへ.....はれにれの会...(55)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 誉子
土屋真美子



「幼稚園真諦」を読む その二

—「幼稚園教育の在り方」と対応させて—

津 守 真

二 幼児の生活

倉橋惣三の「幼稚園真諦」第一篇幼稚園保育法二、「幼児生活と幼稚園生活形態」で、幼稚園の生活が、できるだけ幼児の本来の生活に合致するようにということが強調され、次のように述べられます。

「幼稚園生活形態が幼児にとって、少しも無理はなからうかと心配していくとき、その無理は一切何に對してのことかと申しますと、それは、幼児の能力に對して、無理があると

か無いとかいう問題を言っているではありません。子供の能力に不相当な教育をする。そんな無茶なことは苟も教育といわれるものにあろう筈はないのです」

「むつかしいことを教えないようにせよと、そんなことを申すのではない。易いことを教えても、生活形態に無理があつてはならぬのです。……しかも、今日までの幼稚園保育法の研究は、子供の能力に属する方面や、その教え方のこまかい点において多く行われ、肝心の幼稚園生活については、行われていなかった観があります。これを要するに、幼稚園の真諦は、何を保育の目的とするか、如何に能力に相当させるかということを考えるだけでなくして、如何なる生活形態に幼児を生活させるのが、幼稚園の真の姿、実体であるうかということではなければならぬのであります」

幼稚園で、幼児に無理なことをさせないようになるとき、幼児の能力に対して無理がないように保育内容や教材を選ぶということではないと倉橋は明言します。彼の考えはもっと根本的な点をつきます。幼児の生活の全体にとって無理がないように、つまり、生活形態をよく考えるようにと云います。幼児にはおとなとは違った生活の仕方があるのだから、おとなの生活様式を子どもに移すのではなく、幼児の生活があるがままに尊重し、幼児として十分に生活できるようにおとなが考えるところに、幼稚園の土台が作られるのです。

幼稚園の枠を最初にきめておいて、その中に子どもをはめようとするのでは、何だか変だ、と倉橋は云います。朝、子どもが登園してきたその時から幼稚園は始まっているのであ

って、皆を集めて挨拶をするところから始まるのではないのです。見学者が、いつ保育がはじまるのですかと問うのは、おとな中心の考え方をもっていることを示しています。幼稚園の生活は、もっと、幼児の自然の生活形態のまままでできないものか。子どもが真に、そのさながらで生きて動いている生活を幼稚園の中に実証できないものかを倉橋は問います。そのような生活は、幼児においては遊びです。幼児らしく遊んでいるところに、幼児の眞の生活があり、幼児教育はそこをぬきにして考えられません。幼児が十分に遊べるように心を砕くのは、実に具体的で、実際的なことであります。

そしてまた、発達心理学や保育研究が、個々の能力の発達や効果的な指導法については詳細で厳密な科学的研究を行いながら、幼児の生活そのものについての研究は現在もなお極めて少いことは、「幼稚園真諦」が書かれた当時とかわりません。

「幼稚園真諦」を補うものとして、倉橋惣三「学校教育法における幼稚園」（幼児の教育第四十六巻第五号 昭和二十二年）を合わせて読みます。その中で、教育基本法第二条（教育の方針）について、とくに「實際生活に即し」ということについて次のように解説がなされています。

『第二条 教育の目的は、あらゆる機会、あらゆる場所において実現せられなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、實際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。』

らない』

『幼児に於て實際生活とは遊んでいることである。……』

自由遊戯は、大人がこれを見る時、ロマンチックであり、ふうわりとしたものである。しかし幼児自らにとっては実にリアルなのである』と。

倉橋惣三は、子どもが遊ぶ幼稚園を、徹底して主張したために、童心主義者、ロマンチストであり、現実から遊離していると批判された時期がありました。倉橋は、おとなの目の中にはロマンチックな見方があることを承認しています。しかし、幼児自身にとっては、遊びはおとなの見るようにロマンチックなものではなく、真剣に生きる姿そのものではないか、おとなの側から云えばロマンチック、幼児の側から云えば現実的リアリッであるといえます。現実には、実際に生きていくことにおいては、子どももおとなも同じで、生きることの表現が違っていると云いかえても良いでしょう。おとなには、自分の表現の仕方がすべてだという自己中心が根深くあるので、子どもの独自の表現の仕方——遊び——を認めることができないのだと思います。

子どもの遊びは、実際に私共の身近にあります。

『若し先生が、『砂で汚れた手を洗い實際生活を離れて、教育の中にお入りなさい』と言ったとする。すると幼児は、こう云うであろう。『私は先生の教育のあいだは空虚なのよ。先生が云うとおりにしていれば、筋肉は発達し、技能は進歩し、知識はつくけれども、それは私の實際生活ではありません』と。それに対して、遊んでいる時、幼児は彼等として

の實際生活に充実しているので、幼稚園としては、そこに即してゆかなければならない」
私は、かつて、倉橋惣三は保育の實踐をしたことがないから、その観点からは彼の論には不十分な点があるのではないかと考えたことがありました。しかし、このような文章によむと、彼は実に保育の實際をよく知っていたと私には思えます。むしろ、保育の實踐にたずさわっている人が、子どもの實際をよく見ていないことがあることに、しばしば気付かされます。それは實踐の人が自分中心の考えになっているときです。自分の都合、計画、知識、理論で子どもを動かそうとしているときです。實踐者は、ともすると自分中心になろうとする自らの傾向に抵抗して、他者である子どものあるがままを認めて一緒に生きようとはじめるとき、子どもの實際の姿を見ることができるようになります。

倉橋惣三は、日日の保育者としては保育の實踐にたずさわらなかつたでしょう。けれども、子どもの實踐に即して保育をしようと努めていた保育者たちの中に園長として交つて、想像力をもってその人たちの立場に身をおこうとしていたのだと思います。園長もまた、管理者として自己中心になる傾向を自らの中にもっています。それを破ろうとする努力の中で、保育者と子どもとの間のことを理解してゆくことができたのでしょう。このことは同時に、倉橋がこれを書いたころのその幼稚園の保育實踐者たちが、日日のこのような自分自身との戦いの中で保育していたことを示すものであると思います。

「幼稚園教育の在り方について」の中で、幼児の生活に対応するのは、IV改善の視点、1

(4)です。前にも述べたように、これは昭和六十一年の文部省の報告書で、四、五十年も前に書かれた倉橋惣三の著書と直接の関係はありません。ただ、いずれも、幼児教育の本質を問うことにおいて共通するものがあるはずだという点でのつながりにほかなりません。

「1(4) 幼稚園教育は遊びを通しての総合的な指導によって行われるものであること、

幼児の生活の中心は遊びである。この時期の遊びは、幼児が、大人や友達とのかかわりの中で、意欲的・主体的に興味や関心をもち、身体を働かせて周囲の環境や文化にかかわり、活動を創造し、展開するはたらきの全体と行うことができる。……幼稚園における指導の中心は、このような遊びにあるのであり、その中には幼児が人間として発達していくのに必要なものが混然一体となつて含まれている。その意味で、遊びは一定の系統的観点から分析しつくせないものであり、その望ましい指導は必然的に総合的かつ柔軟なものとなる」

ここでも、遊びを幼児の生活の特質としてとらえています。ひところ、遊びは学習に役立つ範囲で価値があるというような論がいわれた時がありました。私はこれは幼児を實際に即して認識していない浅薄な論だと思えます。遊びは、幼児が幼児らしく生きる仕方であつて、幼児期そのものと切り離すことができません。幼児は遊ぶ存在です。その観点から云つても、「幼稚園教育の在り方」のこの一節は重要な部分であると思えます。

三 保育者の生活——教師の役割

幼稚園は、幼児の生活だけが成り立つものではありません。幼児が幼児の生活をすることができるよう、保育者が支えていなくてはなりません。そこで、保育者がどのように生活するか、教師の役割をどのように認識するかは、幼稚園の性格をきめるのに重要となります。

「幼稚園真諦」の第一篇、四、「幼児生活の自己充実」には、次のように述べられます。

「幼児の生活それ自身の自己充実に信頼して、それを出来るだけ發揮させて行くということに、保育法の第一段を置くとして、それには幼稚園として適当な設備を必要要件とします。この意味に於て、幼稚園とは幼児の生活が、その自己充実力を充分發揮し得る設備と、それに必要な自己の生活活動のできる場所であると、こういいています」

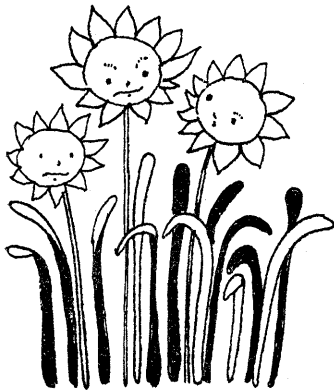
「その設備の背後には、先生の心が隠れて居る訳です。ですから設備とだけいっても、その設備の心の中に、先生の教育目的が大いに這入って居るのであります」

ここで、保育者を環境の重要な部分として述べています。それほどに、保育するおとなは幼児の生活を支えるものとして位置づけています。さらに「幼稚園真諦」五、「幼児生活の充実指導」には、教育者の働きについて、次のように述べられます。

「目的へ向っての指導という意味を強く考えますならば、こちら、すなわち先生方へ引きつけて居ることになります。幼稚園の先生方の中には……はっきりなしに子供に向って働

きかける先生(があります)。たえず苛々しながら働きかけるのです。いらいらとは、自分の心を本体として向うに要求する、非系統的断片的不満感情であります。……その苛々している先生は、自分の目的を以て子供の生活に臨んで行く力が、強過ぎていることにもなりましょう」

私共もしばしば体験する「いらいら」という感情がどこからくるかがよく説明されていません。それは「自分の心を本体として向うに要求する」自分中心が根本だと云います。目的や目標は良いものだったとしても、相手に対する配慮なしに、目的や目標を押し出すときには教師の自分中心になります。これを倉橋は「非系統的断片的不満感情」と云います。具体的にせよ、抽象的にせよ、相手に対する期待水準が最初からきままっているのですから、相手がそれに沿ってこななければ、当然不満感情が起ります。「自分の要求を以て相



手を見て、思う様にならないとき、そういう感情が残るのも、こっちからいえば説明のつくことでありまして、熱心であればこそ、そういう感じも起る訳なのでありますが、之を系統づけていけば、深みのあるしつとりとしたものになるのを、非系統的に断片的に出してくると、この苛々になるのです」と倉橋は分析します。

倉橋の「学校教育法における幼稚園」論において、第七十八条（幼稚園の目的）「幼稚園は幼児を保育し、適当な環境を与え、その心身の発達を助長することを目的とする」ことが論じられ、とくに「幼児を保育し」ということがとり上げられています。何故「幼児を保育し」と云って、「幼児を教育し」といわないのか。

「結論としてこう云える。幼稚園の目的が教育にあるというのは、仮に相手は幼児である事を考えず、これも亦人間であるという事だけで考えた場合であると思う。皆さんはあの幼児を抱いて、実に人間であると思うであろう。幼児が三歳の子、四歳の子たる事を忘れるのではないが、人間として抱いている時、皆さんは幼児を教育する事を考える、しかし、実に三歳である。四歳であるという事に心が注がれた時に、保育してやらねばならぬと考えるであろう」

保育というときには、具体的に相手があつて、その人との応答関係があります。しかもそれは、相手が自分の判断で自身の生活を作ってゆくのを支えるような応答です。だから、単に外的な行動に対して反応したり刺激を与えるだけではすまない。内面に対して応

答するのには、こちら内面の部分で受けてゆくことになりますから、こまやかな配慮と
なってゆきます。こうして、子どもたちの中にあつて、さまざまな子どもと応答してゆく
のが保育者の生活です。

幼児の指導は、「外部の標準による指導でなく、相手の内部指導でありますから、子供
の中に入っていないと出来ません」と「幼稚園真諦」第一篇 五「幼児生活の充実指導」で
述べます。

「幼稚園教育の在り方」の中で、この点はⅣ改善の視点1(2)に対応します。

「(2) 幼稚園教育は環境による教育であること、幼稚園教育の目標が有効に達成されるた
めには、幼児が、自発的・主体的にかかわれるような環境の構成が最も大切である。その
環境には、人的・物的の両要素が含まれていること及びその核をなす教師の役割につい
て、教師の十分な理解が求められる。この場合、教師の果たすべき役割の基本は、幼児と
生活をともにし、幼児との信頼関係を十分に築いて幼児の心に触れ、その発達や興味・関
心の芽生えを発見し、それを育てることによって、幼児の心身の発達を適切に助長するこ
とだということができる……」

ここで、環境には、人的環境と物的環境の両方があるとされ、その核をなすのは教師で
ある人間と考えられています。物的環境は、教師にとっては最初から与えられている部分
が大きいわけですが、教師の使い方によって、子どもにとっての物的環境の意味は変化し

ます。環境は人が変容してゆくものです。

更に、教師の果たすべき役割の基本が、明瞭に述べられています。その第一は、幼児と生活を共にすることです。幼稚園においては、教師は、子どもから離れたところに立つのではなくありません。朝、子どもが登園したときから、帰るまで、生活を共にすることが前提となります。その教師の「私」が子どもと一緒に、一日を歩む人となる時、子どもにとってすべての環境が生きて輝いてきます。

第二には、信頼関係を十分に築いて幼児の心に触れることです。子どもと身体的に一緒に場にいるからと云って、心に触れているとは云えません。私の心が子どもの心に触れるのには、私はどうあつたらよいか、また、どうしたらよいのでしょうか。大きな課題です。

第三には、その発達や興味・関心の芽生えを発見し、それを育てることです。幼児においては、発見されるのは芽生えです。それがどのように花を開いてゆくかは、まだわかりません。先を急ぎすぎ、形を期待しすぎると、芽の段階で枯らしてしまいます。育てるのは周囲のおとなの日日の労苦ですが、育つてゆくのは芽自身です。

こうして、幼児の心身の発達を助長するのが幼稚園教育です。「助長する」というのは、再び倉橋の「学校教育法における幼稚園」によれば、「受身的アクティヴ」「パッシヴァリティーヴ」です。

「幼稚園教育のむつかしさもこのこつにある。こんなにアクティヴなものを、こんな

にもパッシヴに表現しなければならないのである。あらわに子供に働きかけていないでしかも働きかけているのである」と倉橋は述べています。

私は、受動性と能動性は、保育行為の両面だと思います。保育においてはとくに、子どもの心や行為を受ける側面は重要です。おとなが、受ける側面をはたらかすことなく、能動の面だけを出したら保育にはならないと思います。そして、子どもの自発的・自主的、創造的行為に興味を見出すとき、おとなの行為は一見受身に見えても、実に大きな規模の能動性を発揮しています。

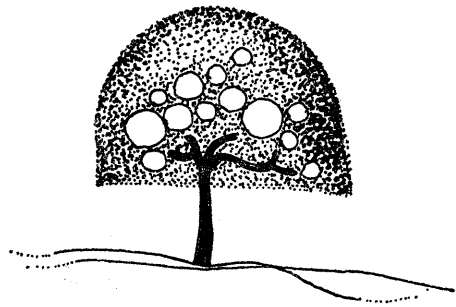
保育者の生活及び教師の役割をこのように認識するならば、幼稚園は幼児が生活する場となってゆきます。

(つづく)

(愛育養護学校)

第二十五回 異世界からの通信

堀内 守



「ホントは」

数々の「ホントは……」がやってきた。いずれも、一様な現われ方ではない。

夏空の星たちを眺めて、「金の砂」や「銀の砂」だと感じたり、天の川をミルクのようだと感じていたのに、それはまちがいなのだという。見かけなのだという。

「ホントは……」と、その声はおごそかに告げる。「ホ

ントは……」ずっと遠くにある巨大な星なのだ、と。あるいは、「砂どころか、地球ほどもある星なのだ」とか、「太陽よりも大きいのだ」と。

告げる方は親切に教えてくれたのであろう。だが、教わる方にとっては、「ホントは……」のもたらすものは親切さを通り越している。「まだ、見かけを信じているのか」というような、幼なさをあざ笑うようなときもあ

り、とくにそんな段階を通り過ぎた自分へのいとおしみであったり、得意然とした口調のときもあった。

だが、「ホントは……」と告げてくれた人も、ホントはそうみごとに割り切っていたのだろうか。ホントは一方が他方を圧倒し去るようなものではなく、見かけを大らかに認めたり、「ホント」の世界を見近なところはまだ翻訳するのに努力を必要としたのではないか。たとえ「太陽よりも大きいのだ」と説明してくれた人でも、そのことを体験の世界にまでもってくるにはかなり苦労したに違いないのである。

UFO

対流層も成層圏もつき抜けてやってくるというUFO。「未確認飛行物体」というのが「ホント」の名前だ。おかしな名前。名前はあるのに「体」はない。その名のイミは、「あれどなきがごとし」に近い。イメージとしては、お皿、ソーサー、お盆などのような形に擬せられている。写真も公開されている。けれども何であるのか、

「未確認の物体」なのである。

「ユーホー」と呼ばれるに及んで、イミの方は消えた。本来の「未確認物体」の方のイミは軽くなり、「ユーホー」は、ヤッホーとばかり人びとの想像力を駆り立てはじめた。「空飛ぶ円盤」という表現は、このような現われだった。「未確認飛行物体」という名称は、「未確認」の方に重点を置いている。だが、「空飛ぶ円盤」の方は、「未確認」どころか、「見た、見た、こんな円盤型をしていた」と語っているのに近い。

UFOを「ユーホー」と言うだけで、何らのイメージも湧かないとしたら、「空飛ぶ円盤」などということばも生まれはしなかっただろう。

だが、いまや「ユーホー」ということばはちゃんと「空飛ぶ円盤」だと思われている。のみならず、写真を撮ったという人、「見た」と報告する人、しかも複数の人が同時に「見た」ことを証言したりする。目撃談は増える。

思弁的な推測や作り話が生まれたり、神話的な物語が

生まれたりする。つまり、知覚されたものが幻を生んだのか、それとも無意識のなかにあったものが、錯覚や幻になって生まれしてきたのか。

「ホントは」どちらなのだろう。そして、「どちら」という言い方もおかしくて、「ホントは」いくつもの場合があるのかもしれない。

宇宙

前漢時代の淮南子えなんしは、たくさんの著書を残した。そのうちのある部分は『淮南子』という本人の名前をもっている。同書の齊俗訓には、宇と宙についての解説がある。 「宇」は天地四方をさし、宙は古往今來の意であると説かれている。簡単に言えば、「宇」は空間をさし、「宙」は時間をさしている。

この説明のしかたはやや抽象的だが、同書のなかには「宇」と「宙」に関して別の説明もある。こちらの方がずっと具体的だ。それによると、「宇」は天が覆うところのもので、「宙」は地の依るところだという。

これがなぜ具体的なのか。

踊りの振りつけであれ、遊戯の振りつけであれ、「天が覆うところのもの」を表現するには両手をできるだけ伸ばしてゆっくりと天空形に動かす所作をする。「地の依るところ」を表現するには、両足で地面をどしんと踏む所作となるだろう。これは万国共通である。いや、正確に言えば、どの子どもたちでも同じような所作をもって応えるだろう。

相撲の仕切りの際の所作も、この伝でいけば、宇宙を表現したものであることができる。

こんな面白い説明は、幼ないレベルの「ホントは……」では生じない。

空の星たちを眺めてあれこれ想像している段階をAとする。天文学の知識をもとに、概念をもって説明するやり方をBとする。そして、いまのように、しぐさで宇宙を表現する所作をCとしてみる。すると、Aに対してBを対置し、「ホントはAは見かけであって、ホントはBがホンモノなのだ」というのもどこか幼ないもののように

に見えてくる。むしろCなども含み込んで考える。「ホントは……」もなくては十全とはいえない。ある段階までは、AをBで克服しようなつもりになるのも悪くはない。だが、次の段階ではもういちど、Aを認め直す段階が必要だし、Cに目を向ける段階もなくてはどこかいびつになってしまう。

「宇宙」という概念は、これらのA、B、Cに応じて伸縮自在である。宇宙は「世間」をさす場合もある。天文学や宇宙科学のさす宇宙は限りなく広い。哲学の概念たる宇宙は、簡単にいえば、時間と空間のうちにある事物の全体をさす、というのが約束だ。しかし、すぐにAやCからギモンが出てくる。Aはいうだろう。「はて、時間と空間のうちにあるとはどういうこと？ 全体ってどういうことかしら？」Cからも出る。「それは、要するに、いまのいま身も心も快調に動いているということの表現かもしれない」などと。そして、「みーんな、みーんな、あれも、これも、あれも、これも……みーんな。これが全体ということ」などと、からだで表現すること

であろう。

宇宙船

もはや「宇宙」は、普通名詞から脱しつつあるようである。「宇宙○○」は、もっと身近なものになっている。宇宙船、宇宙人、宇宙塵、宇宙線なども日常用いられるようになったし、宇宙船のイメージにもこと欠くことはない。宇宙戦艦ヤマトから、今日の宇宙刑事にいたるまで「宇宙○○」は、いつのまにか「宇宙のあなたからやってきて、ふだんはふつうの人と同じような生活をしているが、いざというときは変身をする」までに変わった。

鞍馬天狗、白馬の騎士、スーパーマン、ウルトラマン、宇宙刑事。一連の筋がたどれそうだし、その主人公の名前とともに育った子どもたちの風景も浮かびあがるだろう。

あなたの惑星の名前もさまざまである。ネフェロス星、オザゲン星、ポーサン星、ラーマ星、ケンタウルス

星、ピラス星、ドサデイ星、オセアニア星、フォーマルハウト星、ラルフ星。その他もろもろ。しかし、「ホントは」ギリシア神話のなかに登場する神々の名前に近いものが多いし、なかには明らかにギリシア神話やローマ神話から採ったとおぼしきもの、ヒントを得てもじつたとおぼしきものも少なくない。それくらいギリシア・ローマ神話は豊富なのである。

星の名、登場人物の名が星座や星雲の名とダブってしまふのもそのためである。

かなたより

「かなた」からやってくるもの、はいろいろである。予期せぬ時に不意にやってくるものがある。予告をしてやってくるものもある。期待しているときにやってくる者もある。いずれも何らかのメッセージをたずさえている。それでなければ物語ははじまらない。黒船であれ、風の又三郎であれ、サンタさんであれ、いろいろなメッセージをもつてやってくる。攻撃者として、助っ人として、

あるいは友として。それに応じて対応も変わる。反撃、降伏、共存、交友、交流、交換、混在、アマルガム。

同一のものが襲撃者として現われたのに、次の段階では馴致じゆんちされてしまい、さらに次の段階では友となり、助っ人になるといふように変化することもある。例、ゴジラ。

長い時をかけて家畜化されていった動物のことをベースにしているのかと思つたら、さにあらずで、そんなに手がかかつてはかなわなるとばかりに、その辺の事情説明は省略されている。つまり、第二作あたりから、事情はさておき、かつての第一作のときのいかつい顔たちは何となく柔和になつてしまつていふのだ。あげくのはてには、第3作あたりまで連作がつくられて、最後には何とかして、そのものを消すために、「かなた」へ去つていくという別れの物語までつくり出される始末である。これらをたどつてみると、「子ども」の人氣者がいかに多様な変遷をたどるかよくわかる。いささかグロテスクな『E・T』が親しまれたのもこの変遷と合致した

からである。

さて、この「かなた」であるが、それは決して物語的な「かなた」に限られるものではない。「かなた」は象徴的であるから、この小さな部屋にいて、心は遠い世界へとさまよい出ることもある。今日のようにハイテクノロジーが出まわりはじめると、自閉的なまてになま身の自分は小さな空間やカプセルに閉じこもり、人間関係のわずらわしさから逃れて、心だけを「かなた」で遊ばせるといふことも機能的には可能になる。

説話

噂が人を呼ぶ。世間一般の風評がにぎにぎしく増殖する。ふつうの噂には尾ひれがついて、好奇心やセンサー・シヨナリズムがそれをさらに煽る。異常な情緒もこれに加わる。

噂のタネはさしたることでもないのに、それが一挙に増幅し、ポテンシャルを高めて、国際問題にまで発展することも起こる。実に、人びとはいまや冗舌になったの

だ。それとくらべると、カプセルに閉じこもろうとするのは、冗舌から逃れて、ひとりしみじみと自分と対話することに通じているのかもしれない。しかし、別の見方も可能だ。にぎやかにおしゃべりをしているのは、おしゃべりをしていないと不安だから、みんなでわいわい言い合っていて、何かの物の怪を見まいとしているようなものかもしれないし、自閉的に心を遊ばせている子どもは、老境を楽しんでいるのかもしれない、と。つまりは、転倒である。同様の現象である。あちこち利害のぶつかる人間関係のわずらわしさをさけて、利害を超越した境地とは、自閉的で、自己完結ではなかったらうか。仙人、隠者、世捨人。みな「人里離れた」ところにささやかな「雨露をしのぐ」ための庵を建て、そこで達観であるか、世迷い言であるか、はなはだ超世俗的な生活をしていったものらしい。

墨絵の世界である。水墨画の世界である。直接それだと指摘はされていないが、映像の世界は水墨画に似ているところがある。生活の匂いがしないという点だ。

この場合の「匂い」も、意味は幾通りもあって、鼻で感受する匂いの段階もあるし、隠喩としての「匂い」もある。

万能の力をもった超人が、いざというときに悪を完全に消してみせるという説話は、子ども番組にはつきものであるが、この種の説話と並び、墨絵ぼかしの枯淡の世界がひそかに人気を呼んでいる。清らかな世界。だが、何となく、うさんくさい清らかさ。

カメラの目

カメラの普及によって、かつての墨絵の世界が修正され、別の枯淡の世界を創出したのだ、と考えてみよう。微妙なところだが、どんな写真でも記録性をもっている。旅行記、日記、紀元文、メモ、備忘録等に代わって、カメラは微妙な一瞬までも記録にとどめる。カメラのトリックにより、新たに生み出される世界もある。合成写真、トリミング、モンタージュ。

枯淡の世界は純愛というテーマに簡単に転化してしま

う。無邪気と未熟、無邪気と無欲、というような結びつきが主人公たちのパーソナリティやキャラクターを形づくっていて、状況の解き難さはテーマにはならなくなつた。

カメラのスイッチを押したとたん、それは記録されたことを意味する。現象された写真は、一枚一枚が物語りを紡ぎ出しはじめる。

生まれた直後の顔、一ヵ月目の顔、一年目の顔、読みとり方によっては幾通りもの読み方ができる。そこに直接写されてはいない撮影者の「腕」の水準さえも。

カメラの目がこんなに一般的になったのはだれもがポーズを取るようになったことと関係があるろう。その昔、まれにしか写真を撮ってもらえなかった世代の人びとはポーズということを知らなかった。だから、スナップ写真を知らない。それなのに、晴れて写真に写されるときにはシャットチョコばっている。ところが、ポーズを取るということは、シャットチョコばることをせず、ごく自然にふるまう、ということを意味する。つまりはカメラを意

識していないというふりをするということである。

加えて、できるだけうまく、理想像に近く撮ってもら
うべくポーズを取る。

こうして、「はい、ポーズ」と「はい、チーズ」が接
近する。

ファンタジー

自分の住んでいる町であれ、国であれ、未来はどうな
っているか描いてみようと呼びかけてみる。子どもたち

の描く未来図は、建物はビルのみであるし、交通の主力
はロケットだったりする。まれに、田園風景が描かれる
こともある。

だが、ふしぎなことに、彼らの描く風景は、圧倒的に
昼のものである。夜の風景ではない。夕方でも、朝でも
ない。まっ昼間。

未来は、さんさんと陽が当たっているものと思われて
いるらしい。

しかし、宇宙への空想は想像以上に古い。神話のイカ



ロスは大空を翔んで太陽に挑戦したし、古代ギリシアの作家ルキアノスは、月を別世界に見たてて、月人を描写した。近代科学の成立以来、人間のこのような空想はにわかには具体性をもちはじめ、なかでも地球外の知的生命に対する可能性をさぐる試みは想像力を刺激した。文学や小説の世界ではこのテーマは火星人の侵略という形で始まったと考えることができる。

現代社会の悪夢が反映された未来もある。また文字どおり地上の束縛から解放された未来もある。その広い世界においては、子どもがすでにいっばしの主人公として大人顔負けの活躍をすることさえある。ここは未来への夢を十分にふくらますことのできる場であった。

だから宇宙探検、宇宙開発にとどまらず、惑星文明、銀河文明、宇宙論的考察……等々が、途方もない規模で広がっていく。

だが――

子どもにもわかることは、人間が時間に拘束されて生きていくということである。つねに「現在」に生きるほ

かしかない。しかも、その「現在」が変化していき、明日が今日になり、今日は昨日に姿を変えていく。時間を征服することは、人間の最大の夢であり、不死の願いはそのもっとも切実なあらわれであった。

いきなり不死へと飛ぶよりも、時を部分的にでも征服することはできないだろうか。これは人為的に時間のなかを駆けまわるといふ発想につながる。タイム・マシンがそれだ。

しかし、かりにタイム・マシンができたとしても、そして過去へ出かけていって、過去を変えたら現在には存在することになるのだろうか？ ことによると、いくつかの現在がありうるのではないか。子どもにも人気があり、大人にも人気があるところのパラレル・ワールド（並行世界）はこのような可能性をさぐったものである。

そして、面白いことに、ここまでくると、ファンタジーは単なる夢であることをやめて、可能性の世界という確率論のような世界に私たちを誘っていく。そこには意外にも、人間の存在を再考させるようなテーマが並んで

いるのである。

たとえば、人の進化というような問題だ。

ありえたかもしれないもうひとつの世界、もうひとつの歴史という観点から現在を見直してみることは、相対化をしてみるという行為である。人間の歴史も絶対的なのではない。

人間の歴史も、宇宙という大きな視野のなかでは、一つの不安定なものに過ぎなくなる。長いと思われるその歴史も、地球の誕生という観点から見れば、ほんの一瞬であるかのように見えてくる。

と同時に、そんなにちっぽけな存在なのに、ひとりひとりはかけがえのない存在であることもわかってこよう。

子ども——そうだ。小さいと思われていた子どもも、実は、新しい人間のよみがえりのテーマという新しいニュアンスをもってあらわれてくる。人類の運命をきめるのも、人が人になっていくのを手をかけて、目をかけて、その成長・発達に一喜一憂し、さまざまのわずらわ

しい関係のなかでどうやら自分というものをつくりあげ、他とのかかわりのなかで、ともにつくり、つくられるという関係を継続していくのが人間のようである。

高度に発達した生物であるようにも見えながら、また別の観点から見れば自尊心の強い、いがみ合いばかりしている不条理な存在でもある人間。そう見ることは、思いがけない世界を現出させる。その中途半端な存在がユーモアの契機となるということにほかならない。そこでは笑いも、悲しみも、ベシミズムまでがユーモアのなかにまとめあげられていき、「やっぱり子どもは人間の父だ」というような逆説がしみじみと本当だと思えてくることもある。

自由と不自由も、そのあたりで謙虚なまとまりを見せ、希望や夢をいつくしむ道に光を当ててくれることになることだろう。

(名古屋大学)

自然とのふれあい（その五）

——冬・科学性を育てる——



齋藤芳子

風の日の保育

夜半の風の吹き荒れた朝、空気はさすように冷たい。

急いで林の下道を通って、幼稚園の裏門から運動場に入る。

松の小枝の大きいのが二本、運動場の真中まで吹きとばされている。あちこちのくぼみや運動場の片すみに、秋には色美しかった紅葉や桜、雑木の枯葉が、吹きだまりになっている。ふと見ると、手のひらの大きさ位の丸い枯草のようなものが眼にとまる。拾ってみると、小鳥

のひなの巢立った後の古い空巢が、こずえから吹きとばされて落ちたらしい。枯草とビニールを細かくちぎったものでお椀のように丸くつくってある。

せぼめられた自然の中で、ビニールを巢作りに使っているのを、はじめて発見した。園児たちにも、早く見せて観察させたいと砂場の側を急いで歩く。

砂場の中に何かキラッと白く光るものが見える。ガラスのかげらでも落ちていれば危いと思って、しゃがんでみると、三センチ位の大きい霜柱が、砂を持ち上げて、砂の中に、たくさん立っていた。

朝日に霜柱がとけないうちに、園児たちに見せたいと思って、大急ぎで保育室の方へ向う。

遠くから姿を見つけた園児たちが、

「先生、おはよう…」と走って来る。

「先生、手に持っている物何？」

先生「運動場の隅に落ちていたので拾って来たの、何だろうね」

「見せて、見せて」と皆で大きわざ。

「あっ、これ小鳥の巢だよ、草とビニールでお椀みたい
に作ってある」

「風で小鳥の赤ちゃん落ちて死んだのではない？」

「小鳥は春に赤ちゃん生まれるから、もう、とんでしま
って空巢だよ」

「この巢、ちょっと引張っても、こわれないよ、丈夫に
作っているね」

先生「一つしかない巢だから、大切にしておきなよ、先生や、
おともだちにも見せてあげて」

「その前に、先生いいもの見つけたから、砂場に入らな
いで、しゃがんでお砂を見てごらん」

「あっ、霜柱だ、大きい霜柱だね」

「ガラスみたいだね、はじめて見た」

「畑や土のところだと、寒い時にあるよ。僕見たことあ
る。コンクリートの所はだめだけどね」

「もっと探しにいこう」と散らばってゆく。日陰の土の
あちこちで、足ぶみをしている。霜柱をふみつぶしてい

るのだ。

「先生、霜柱ふむとサクサクと音がするよ。氷よりやわらかいし、おもしろいよ」

先生「松の木の折れた枝を、つまづくと危いから、テラスの横に、みんなで力を合せて『ヨイシヨ、ヨイシヨ』と運んでちょうだい」

大きな二本の松の枝を、十人位のこどもが、「エンヤコラ、エンヤコラ」と、寒い中を楽しそうに、運んでいった。

先生「ありがとう、片づけてもらったお礼に、松葉すもうを作って、遊んであげよう」

テラスの日だまりに集ってきた園児たちと、針のような松葉を、小枝からみんなちぎり取って、葉先の針をそろえて、一にぎり程の松葉をゴム輪でとめる。

次は画用紙に、ちょんまげのおすもうさんの顔や、手を書いて切りぬく。

松葉の束の元を切りそろえて、切りぬいたおすもうさ

んの顔、手、松の束に差し込む。これで松葉力士の出来あがり。

空箱や机の上に、丸く土俵を書く。おすもうさんを、針を足にして、二人向い合わせて立たせる。

指先で土俵の側を軽くトントンとたたくとおすもうさんの足が、こぎざみに動き出す。

土俵の外へ出たり、倒れたりしたら負けになる。作ったこどもたちは、夢中になって、ハッケヨイヤ、ノコッタ、ノコッタと、応援している。

「僕も自分のを作りたい」

「一緒に作ってすもうをしよう」と、友達と組んで、そこから、松葉だらけにして、松葉のおすもうさん作りを教えたり教えられたりしながら一生懸命に作っている。

夜半の嵐のくれた松の小枝、小鳥の空巢、霜柱で、自然の現象に気づいたり、自然物の教材で生き活きと、造形したり、遊んだり観察したり、一日中たのしい保育だった。

松ぼっくりも、ダンボールにいっぱい拾って、そのう

ち色でそめて、モビールでも皆でつくろうね。

雪の日の保育（第一日目）

立春が近いというのに、昨日から降り続いた雪は、三十センチ程に積っている。

雪の多い日は、必ず雪と遊ぶことにしている。

先生方は門から保育室へ行くまでの道の除雪作業をして、幼児の通路をつくっておく。

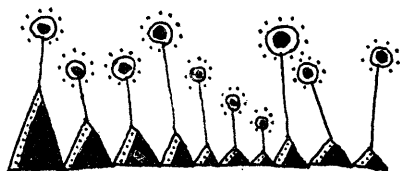
運動場の雪の原や、雪の重みで、たわわになっている樹々の枝はそのままにして、幼児の観察に供する。

保育室のストープは、どんどんたいて、雪道をぬれてくる子や、ぬれた手袋を干すようにしておく。

今年最後の積雪だから、一日中雪を教材として、戸外活動をいきいきとやりたいと思う。

雪をふまないように、登園してきた子から、雪だるま作りにかかる。年長、年少各組の前に、出来るだけ大きく、だるまの顔なども、考えながらつくる。

最初に雪のまるいボールをつくって、踏まない、軟い



雪の上をコロコロと丸くなるようにころがす。雪の玉が大きくなり、重くて動かなくなったら、皆で押しころがして、日陰の所にすえる。だるまさんの首も、少し小さめに丸く作って胴に重ねる。一輪車や、スコップで雪を運んで、だるまさんの胴や顔をきれいに、雪をたたきつける。

美容師さんのように、だるまの眼やくちびるなど、いろいろなもので工夫してつけている。頭に砂場のバケツや自分の帽子をかぶせたり、南天の赤い実の房を、だるまの頭にさして女のだるまさんだなど、得意になっている。

年齢差で、いろいろ創造性の違いが分る。テラスの日だまりの端で、雪兎をつくっている子がいる。皆にふまれたら可愛そうだからと、古い金のお盆を出してやる。

日陰の方においておけば、明日までとけないんじゃないかなあ—と話しておく。

雪の創造活動の終わった後は、雪合戦で走りまわっている。

「雪の玉は、お尻か足をねらって投げること」と約束する。おべんとうの頃は日ざしもよくなり樹々の葉すえから、露がしたり落ちていた。屋根の上の積雪も、二十センチ程ずり落ちて、大きなつらからも雨だれのよう露がおちている。

「雪の日は軒下を歩くと、屋根からずり落ちた雪の固まりや、大きいつらが頭にささってけがをするから」と、観察かたがた注意する。金の洗面器に、大きいつららや、氷などを山もり入れてストープの上のせておく。

婦りに園児達がのぞいて、皆水になっているのでびっくりして教えにきた。それをそのままテラスのコンクリートの上において、明日来たらどうなっているか見て教えてねと、話合ってさよならする。

第二日目

立春近くの春の淡雪は殆んどけて、運動場は、大雨の後のようにぬかるんでいる。

「雪だるまの片目が落ちているよ」

「雪だるまがかたむいて少し小さくなった」

「雪うさぎも片目が落ちて小兎になった」

「洗面器の水は、すっかり氷になったよ」

「雪どけの大水で運動場で遊べないね」

「どンドン水流れてたから、お日様出れば、すぐかわくよ」

「どこまで流れるか、見にゆこう」

長靴をはいて、水の旅と一緒にハイキングだ。園内の水は園庭の小さな測溝へチョロチョロ流れていく↓門をくぐって外の道端の広い深い測溝に入っていく↓外の坂道の大きい測溝を早い勢いで水が走ってゆく↓橋のかかった町の大きな川に流れこむ↓船着場の海へ入った。年長児といっしょに歩いた水の旅路である。

園児たちはいきいきしていた。いい考察、思考の旅でもあったわけだ。

こどもの帰ったあと、吹きだまりの残りや、わくら葉を焼こうと思って、葉を取ってみると、わくら葉の下の

土にもえぎ色の親指程の「ふきのとう」が十個位芽を出していた。雑草の古い葉が、いてつく土にへばりついて黄色い雑草の花が蕾をつけていた。

土の上は、まだ雪がつもっているのに、地熱はもう早春で、わくらばの下に、春のいのちを育てていた。

冬来りなば、春遠からじ、とはこの事か？ 雑草の若芽がいとおしくて、わくらばをそつと若葉の芽の上にかけて、焼くのは中止。いい腐葉土になって、庭の草木を育ててくれと心でたのむ。

大切なことは、こどもと一緒に自然の中で観察し、対話をし、世話をする事。

天体、宇宙も大自然の中にあることを知る。積極的
に、自然の内容に取り組み「自然のいのち」「神秘性」
を知り、科学性を育てることに努力の積み重ねが必要だ
と思う。

(宮城県聖光幼稚園)

迷 い ど き (1)

——私の場合——再就職——

向 山 陽 子

実は……私、今、迷いに迷っています。

ある学校から、産休代替教員の話があるのです。つまり再就職（一年間ですが）の話です。

「何故 迷うの？」……実は、一人娘の待ちに待った入園と重なるのです。

「では、保育園に入れたら？」……ええ、でも娘が入園する幼稚園は、まさに「探し求めていた園」なのです。一年前から子どもはもちろんのこと、私自身が先生方や理事の方々から学びたいと、入園を待ちに待っている園なのです。「近くに公立幼稚園はないし（練馬区には三園しか公立がないのです！）近くの私立はあまり……いえ、はっきりいって行かせたくない。これでは、私も仕事をして、保育園にしようかしら……」と私達母子のおかれた教育環境の現状にがっかりし、思いきり遊び、豊かな幼児期をと、仕事をしてきたのに（実は、三年

前までの十一年間、幼稚園の先生でした)、そして、自分の子にこそ、と、後髪をひかれ、涙ながらに、仕事を辞めて、地域に埋没して、ご近所の子育て仲間と、朝から夕方まで、泥んこになって遊んできたのに、どうして、思いきり遊べる幼稚園がないの?と、恨みつらみが口をつけて出そうになっていた時、大先輩から教えていただき、隣の区ではあるけれど、徒歩十五〜二十分程度通える「ひこばえ幼稚園」にめぐり会えたのです。

見学にいくと、子ども達はよく遊び、当然ながら、子達の目はキラキラしており、保育室、園庭からは健やかな子どもの成長を願い、子どもの世界を大切にしている。っしやる先生方の思いが伝わってきます。

副園長の木口先生にお話を伺うと、私自身がこの先生から多くを学べると感じ入り、又、園長室の本棚には、倉橋惣三全集、周郷博全集、森有正全集、幼児の教育復刻版が並んでおりました。

理事の方々の中に、太田愛人牧師、バックの井草教会の熊澤義宣牧師のお名前を見つけた時はびっくりし、さ

らに園長の小塩節先生が、私の主人の大学時代の忘れられぬ教授の一人であったと聞くに至っては、もうこれは「運命」を感じるしかない程の、ひこばえ幼稚園との出会いだっただけです。

最近は大園希望者が多く、私は緊張の極みで面接に臨み、娘は喜々として先生方と遊び、無事入園許可をいただきました。

「四才になったら?」「四月になったら?」と指折り数える娘。「ちょっぴりいやだな。おかあさんは、一緒にいって、迎えにきてくれるんでしょ」と不安をのぞかせながらも「ひこばえの先生は優しいよ。いっぱい、いっぱい遊ぶんだ」と、幼いながらに不安をのりこえて、自分を納得させて、希望へとつなげる娘です。

そう、勤めはじめると、母子で手をつなぎ路辺の草花と遊びながら…と、思い描いていた送り迎えができません。

「じゃあ、その産休代替教員の話を断りなさいよ」……

そうなのよね。でもね……。

実は、娘が四才になった頃から、その学校へ一日三時間、週五日、非常勤で行っていて、その続きを、と、いってくださる話なのです。

「大切な一人娘さんは、その間、どうしているの？」

近くの子育て仲間にお願ひしています。もっとも、その前から朝の九時すぎから、お弁当持ちで、近くの公園や、お友達の家を往き来してお友達と遊ぶ生活でしたから、娘の生活自体は、それほど変化はありませんが、朝九時すぎから午後二時前まで五時間ほど離れて、私が戻った時は、わがままをいって甘えます。思いきりうけとめてあげると、又、すぐ、お友達の中へ入っていきま

す。
非常勤の話がきたのは、ちょうど、そのひこばえ幼稚園の面接が終わり、次の日の発表を不安な面もちで待っていた夕方でした。

朝から夕方まで、私から離れて友達と遊ぶ娘に、何かをはじめなくては、と真剣に考えはじめ、履歴書を用意

しなくてはと思っていた矢先でしたから、一日三時間ならできると、とびつきました。

三月までの話なので、娘の入園には重ならないし、冬の厳しい期間だが、地域の仲間にお世話になりながら、再就職へのウォーミングアップのつもりでがんばってみようと思ったのです。

有難いことに、地域の仲間も心よくひきうけてくださり、「みづきちゃんの好きなように」と、娘がその日、遊びたいお友達のお宅で預っていただけという願ひもない応援がきました。もちろん、母親の私としては、いくら私がずうずうしくとも一―二軒のお宅を決めたかったのですが、事実上、娘の成長の過程、子どもの世界のこと、例えば、今日は女の子と遊びたい。だって〇〇君、いじめるんだもん」(実は、〇〇君は好意からかまい、娘が泣くとニヤニヤして、さらにかまう。娘にはまだそれが好意からとはわからないので、受けとめられないでいるのですが)等と、親の考えたようにはいかず、どこのお宅でも預かっていただけというの

は、本当に有難い応援でした。

ちょうど、主人が長期出張の間に仕事ははじまり、私としては、娘と二人の生活のペースを守れるので、楽なスタートでした。が、娘は夕方になると「寂しいよ、おとうさんのだっこがいいよ」と泣きました。

三週間目、主人が帰ってきた週に娘は発熱しました。ちょうど、大島の方々が避難先でのストレスで風邪や発熱が多くなった時で、娘のそれもストレスからだろうと



思われました。発熱したのが日曜日で、月曜日には微熱となり、私は、「急いで帰ってくるからね」と、預けて仕事にでかけました。今思うと、一日位欠勤して、一緒にいてやればよかったと思います。その時は必死だったのですね。

又、私が勤めに出るようになってから、娘はおかあさんごっこのおかあさん"をしなくなりました。それまでは、「おかあさんごっこしよう」「うん」「おかあさん！」

と一番に名乗りをあげて、一方的に思いどおりに皆を動かす暴君かあさんを演じ、母親の私があだから娘はあのように演じるのだからかと、私を悩ませていた娘でしたが、びったりとおかあさんをしなくなりました。きつと心に余裕がなかったのでしょうか。だからといって赤ちゃんやおばさんもしないのです。プライドのようなものが邪魔をしているようでした。

私は娘が一人っ子で、口うるさい母親とはいっても、基本的には好きに遊べるよう考える母親の私といて、それまでは思いどおりにならない思いや、心細さを感じないでもよかったというのがわかりました。

祖母の家の愛犬、愛猫が死に、自分のざりがにや、かぶと虫が死んで、「おかあさん、死なないでね」と急に目に涙をためて、抱きついてくる娘でしたが、所詮一人っ子。兄妹達との関係で、自分が我慢することのなかった娘でした。そして、家の外では「元氣いっぱい、たくましく、いい子」をやっていた娘でした。

「おかあさん」を演らなくなった娘を見て、どうかやさ

しく強く、のり越えてほしいと願わずにはいられませんでした。

木曜日がお休みなので、我家で遊ぶ日にしたり娘とゆったりと過ごす日にし、主人が休みの土曜日は主人に頼みました。が、主人は眠っていたので、ふとんの中。娘はお友達のお家の方がいいといい出す始末です。もう、女の再就職をはばむのは、娘より主人の方なのだから……。

こうして一ヶ月が過ぎ、三週間の冬休みに入りました。朝八時に朝食をとり、九時には出かけるというリズムも狂いかけてましたが、気持ちの上でのんびりとし、朝食前に一遊びという以前のペースにもどり、娘はしばらく離れていた、絵画、制作に夢中になりました。

私、が仕事をはじめても、朝急がせて、忙しい思いをさせてはいけない。時計を見ながらの生活は、通園するようになったらその先半永久的に続くのだから、と肝に銘

じた私でしたが、やはり急がせていたと反省。

時間の問題というより、心の余裕の問題なのだからと改めて心に刻みつけると、娘との朝食がゆったりと楽しく摂れ、結局、娘も気持ちよく、早く食べるようになってから不思議です。

クリスマス、お正月といつもは会えないおにいさんやおねえさんとも遊び、あわただしい中にも楽しいことがたくさんあり、「成長した」と周囲に印象つけて冬休みが終わり、再び私の仕事が始まりました。

前の一ヶ月の経験から、預ってくださいる家を二―三軒にしぼってのスタートです。

週一回、皆でいっている児童館の幼児教室の先生も、母親のきていない娘を暖かく配慮して下さっているのが、娘の私との会話の中からうかがわれ、有難い限りです。

寒さも厳しくなってきた、これからが私の大変な時期です。

三年前の寒い雪の多かった冬、保育ママさん、職場、

家を守るように往復しながら、寒さからの心細さもあったでしょう。おんぶした私の背中から泣いて離れなかった一才になったばかりの娘を思い出します。朝、夕、寒い中、娘をおぶった私も「どうしてこんな思いをしなくてはいけないの？」と泣きたい思いでした。

あの頃よりずっと時間的に楽な勤めです。娘も大きくなってくれました。地域の協力にも恵まれています。

でも、心して、この時期をすごそうと思います。娘の体はもちろん、心が寒くならないように。

入園前の大切な冬。母子でのんびりゆったりと暖かく、すごせる最後の冬なのだから。春がきたら、心おきなく、外へ送り出してあげられるように、と、非常勤の話がくるまでは考えていた私なのですから。

主人に相談した時、「みづきに何かあったら、あなたは仕事を休めるね」と、念を押されました。

私には、夢中になると、一番近い人を犠牲にしても外のために動いてしまうという悪癖がありました。

この冬一番近い人を大切にしながら、一日三時間ずつ五日間勤められたら、子育てをしながらの再就職も夢ではないでしょう。

私が前の仕事を辞めたのは、子どもを持って以前のようには仕事ができなくなった自分自身への情けなさもありました。

仕事量だけでなく、仕事への集中中、家に帰ってきてから仕事の事を考えられない事からくる申し訳なき。

子どもを産み、育てながら、保育という仕事に携る大切さは頭ではわかっていながら、我子への愛情と、責任を持つ子等への思いが敵対してしまい、それぞれに、充分してあげられない後めたさに、自分自身を追いこんでしまったようです。

又、十年近く勤め、責任ある役職をいただいている手前、主人がいうように「娘に何かがあっても休める私」では、なかったでしょう。

家庭にいた三年間、家庭生活がいかに大切か、身にしみて感じました。そしてやっと家事が好きになってきま

した。台所に立つのが楽しくなりました。

その上でなお、仕事がしたいという欲張りな私です。

娘の幼児期は近くにおいて、その後に再就職ができたら

……との願望を抱いていた私です。

大学の恩師に非常勤で勤めはじめた報告と、その後にくる産休代替教員の話は断ろうと思うと話したら、

「甘いわよ。再就職する気があるのなら、しがみつきなさい」と叱咤激励されたのです。

その日から、私の迷いははじまりました。

— つづく —

出 会 い (その五)

蕪 木 寿 江

何時も 永遠の光を

少年の様に 見つめていた

周郷先生

今はその光の中で

やすらいでいらっしやる事を

確信致します

武市八十雄

*

蠟燭のゆれる灯の中で、花柄でふちどられた小さな紙片の文字がほのかに見えた。私は

縋りつく思いで顔を近づけた。

「少年の様に……少年の様に——」中国にいらっして魯迅の家の所で写した写真を、自ら、「少年の様でしよう」と言われた事が脳裏をかすめた。先生は「幼な子が眠っていくように死にたいものですね」と話されたことがあった。

市々尾幼稚園にご講演にいらっしやったのが一月十四日、そして亡くなられたのが、二月二十八日——。あの日も咳をしていらっし



やった。

— 雪の中を —

「今月の十四日に市ヶ尾へ来て話を、というように考えていましたからね。昨日からそわそわして落ちつかないの。だって、僕の話を聞こうと思つて集まる人がいてね。あそこにいる畳屋の人みたいにさ、ここには僕の言うことをよくわかつてくれる人がいるのよね。これ恐ろしいんだな。いい加減なこと言えないじゃないの」

「読んだり考えたりしてきたけども、僕という一人の人間がいかに無価値な人間かなと思ふことあるね。皆さんもあるんじゃない？」

これ程低級なつまらない人間は無いと思うことあるだろう？ 僕だけじゃないでしょうねえ。昨日はそういう気持でした。それじゃなくても市ヶ尾へ行つても話すことはできない

なあ、と思つてね。雪の中一人で、小田原まで三冊の本買おうと思つて行つて来たのね。

ところが、家を出てから駅に行くまで、(浜沢の駅まで二十分余り歩く) して小田急の電車に乗っている間も、ずーっと咳が出っぱなしでね。苦しくて、苦しくて、したらその三冊の本無いんですよ。駅のオートコーヒーに入つて二百五十円のコーヒー飲んで、『世界』の一月号買ったけれども、あまりおもしろくないね。それ読んで少し気持ちが落ちついて帰ってきました。帰つてきてもまだ気持はちっともはれられないですけれどね。今朝は、七時から起きてどうしよううに話そうかな、と思つて、一生懸命読んだりなんかしてたんだけれども、あんまり読むと駄目になっちゃうからね。急場に読むって言うのは、間に合わせじゃ駄目なのね。いつか、昔読んだのが忘れた頃になつて、あつ、これ



だ——、とこう気がつくんだといいいんだけどね」

一つの小さな片隅の幼稚園で話すことに、これだけの時間とエネルギーと……言いかえればご自分の生命を注いでいる先生がどこにいらっしやるだろう——。どこの会場でも、

その相手が誰であれ、少人数であっても何でも、先生の全身からほとばしるような声には変りはない。「話というものは、一度、口から出した時が生命があつて、繰り返えしはぬけがらのようなものだ」と言われたことがあつた。あまりにも多様化した現在、寄りどころを求めてか、(他力本願も困るが)講演会がやたらに流行している。講師の話の内容が、二度、三度と全く同じことが多々ある。幼児教育の本質は時代と共に変わるものではないので、当然だとも思うこともあるし、又、何度とも同じことを聞くことによつて、理解できる

こともあるが、しかし、先生はいつも相手の人格を尊重し、その時のご自分の思いのすべてを、一人、一人に生命を与えるように語られる。

——精神は不滅である——

この日、お迎えの車の中でも私は自分から一言も話さなかつた。日頃の疑問はいくらでもあるが、先生ご自身が今、巡らしていらつしやる思考の妨げをしてはならず、緊張で固くしまった口は開けなかつた。

そおつとお隣で一時間余り座っていると、「蕪木さん、著作集の装幀は東山さんに頼みたいんだけど、僕みたいのが訪ねて行つて大切な時間をつぶしたくないからね」とおっしゃつた。この言葉がまだ耳元に残っているのに、著作集の完成をみないで亡くなられたとは誰も信じられなかつた。二月十六日にはお

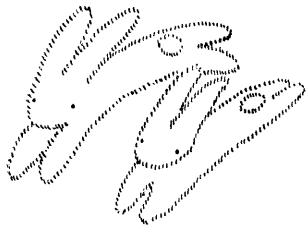
茶大の附属幼稚園にみどり会主催の講演会にいらっしやり、「あなたは春をほんとうに感じていますか」と言われ「春が来た」を皆で歌った。「理屈がわかっていても、感性が生きてなければ実際には生きてこない」と言われた。

十八日には、谷内こうたの個展を見に丸善に行かれ、そのあと、一高、東大時代の友人である福島要一、川上貞司両氏と丸善の地下でコーヒーを飲みながら久しぶりに話された由、その折に「肉体は滅びても、精神は不滅である」と、周郷先生が話されたと同う。まさに精神は宇宙の中に永遠に残るであろうことを確信されての最後の言葉であった。

二十七日の夜、小田原の病院に行く車の中でも、窓によぎる景色に自然破壊を嘆かれ、抗議されるなど気力で生きていらっしやっただように拝察される。カーテンで仕切られた四

人部屋で、苦しい咳の為に眠ることもできず朝を迎えられた。点滴の針も酸素吸入も自らはずし、異物が体の中に入ることをごぼんだ。元気に会話している入院患者に、医者に頼り、薬に頼るより、自分の中にある生きる力が大切なのだ和小声で訴えておられ、病院には三日以上いたくない、と看護する奥様に話し、個室に移されて、その日の一時三十分からやすらかに永眠なさった。ヨーロッパから帰っていらっしやっただ秋にも肺炎を患い、高熱をだしても薬も飲まず、新鮮な空気と野菜、そして生きようとする力を助ける奥様の不朽の愛が、先生を助けられたのだろうと思う。

ご逝去の電話に、間違いであればよいがと同僚とかけつけた時には、泣きはらした喪服の人達が山道を帰って行くところだった。やっぱり本当なのか？ 足がすくんで前にでな



い。泣き伏していらっしやる奥様に言葉もな
くオーバーをそっとかけた。石のように冷た
かった。「先生のところにいつてきてね」と、
やっと言われた。周郷先生は片眼を開けてじ
っと見ていらっしやった。黒く光った眼であ
った。私は丹沢の山波に向って絶叫した。

「——周郷先生——」一瞬、黒い闇がビシビ
シと動いたように思えた。雨もやんで、夜空
いっぱい星が降ってくるようだった。

次の日、ご父兄が子どもの日記の二頁を見
せてくださった。

約束します

すごう先生、どうしてお亡くなりにな
ったのですか……

一月に市ヶ尾にいらっしたばかりなのに……
いい人はなぜ、早く世を去ってしまうの
ですか？

きらいだから？

いやになったから？

あきてしまったから？

たまらなくこの世がにくくなりました
夜ばかりの感じのところをさまようのだっ
たら おやめになって生きかえって

おねがい——

先生の死をむだにしたいくない

お母さんがこんなに悲しんでいます

いつまでも わかわかしく元気で

私達を見守って下さい

先生のお話を守って生きていきます

約束します 涙がとまりません

新星が一つ生まれるでしょうね

先生の光として見えています

先生の知らないひろみより

(卒園生・四年生)

ひろみちゃん

すごう先生は 子どもがだいすきです

子どもは正直で 嘘がないからです

すごう先生は自然がだいすきです

自然は正直で 嘘をつかないからです

子どもは自然の中から生まれてきたのです

自然の美しさを一番知っているのは

子どもでしょうし

自然のきびしさを肌で知っているのは

子どもです

お日様の暖かさも

春に降る雪の冷たさも

夕日のさびしさも……

すごう先生は その自然に戻ってゆかれた
のです

自然から生まれ

自然によって育ち

宇宙を愛し

自然に帰って行かれたのです

先生のだいすきな自然の中に……

ひろみちゃん 泣かないで——

先生はいつでも傍にいらっしゃる

犬ぶりのるり色の小さな花の中に

白い梅の古木の中に

吹きでるみどりの新芽の中に

自然を美しいと感じる人の心の中には

先生はいつでも生きていらっしゃる

* 至光社社長

* 「幼児の教育」七十八巻九号、著作集
第一巻に収録されている。

(市ヶ尾幼稚園)



自分のものへのこだわり

牛山佐智恵

十二月初め、珍しく年長組のRが、「遊ぼう」と事務室の私のところへやってきました。

年中組のときには「夜まで一緒に遊びたい」とよく言っていて、私を笑わせた子でした。夏には砂遊びを、水遊びを、秋には毎日のように近くの空地に虫採りに出かけた私の遊び仲間でした。

その夏のこと、プールの水を張りかえていると、少したまった新しい水に、Rは四つんばいになって顔を入れ

ました。そして「まだ少し砂が残っている」と私に告げては、また顔を沈めています。そのうちつい夢中になったのか、腰までザンブリ水の中へ——あわてて口をついて出たのは、「おれ、パンツ十枚ある」でした。ところがRの着替え袋には、どう捜してもパンツは一枚もありません。自分のでないとしてもいやだと言って、その日はズボンだけで帰っていききました。

虫採りは、カエルの時期から刈り入れどきのカマキリまで。ことにカマキリは、男の子たちの人気の的でした。まるでその体そっくりの葉を選んで身をひそめているようなカマキリ、見つけるには、かなりの集中が必要です。Rは目を凝らして見、メキメキ腕を上げていきました。カマキリにはこの上なく迷惑な時であったでしょうが、子どもたちには、自分の手で自分のものを得ることのできるワクワクする時間でした。Rの帰宅は、いつもその日の獲物と一緒にでした。

そんな去年と比べると、この秋は虫採り熱も峠を越えたとみえ、Rからもそう同行をせがまれることなく過ぎ

てきました。

ところで、そのRが久しぶりに「遊ぼう」と言うので、私は外遊びに誘われたものとはかり思っていました。ところがRは「ここで本を作る」と言い、同じ大きさに紙を切っていました。それからその一枚を出して、「ここに『ほん』と書いて」と言います。すぐに私はその部分に「ほん」と書いたのですが、Rはどうも気に入らなかつたようで、「こうじゃないの」と言います。けれども書き直すようには求めず、「名前はおれが書く」とペンをとりました。私には、Rが何となくさびしげでイライラしているように見えました。

あまり満足のいかない「ほん」を手にしたRと保育室に行き、しばらく一緒に過ごすことにした私は、これまとはどこか様子の違うRを見ました。

私を知っているRは、欲しいものがあると、まずそれを手に入れることに関心を示す子でした。よほど自分のものに余裕のないかぎり、友だちとやりとりを楽しむということはありませんでした。手に入れたものが小さけ

れば、それはしばしば口の中に入れられました。これは今も変わりなく、Rの口にはビー玉や輪ゴムがしょっちゅう入っています。また、どんなときにも、誰に向かっても、堂々と「ちょうだい、ちょうだい」と要求しました。相手から無理やり取り上げるといふことはしませんでしたが、ねばって率直に要求を続ける子でした。

ところでこの日のRは、保育室でも「ほん」作りを続けました。広告紙の商品の写真を切っては貼りつけていくのですが、時折、近くにいるMの様子を見ています。Mは、板に釘の頭を少し残して二列に打ちつけ、その間を通路にしてビー玉をころがして遊んでいました。Rの関心は、どうもMのビー玉遊びのようでした。そうか、というわけで、私はMの方に近づき、それとなくRの様子を気にかけていました。ところが、Rは私と一緒に来ませんでした。しばらくすると部屋の隅に行つて積木を並べ、自分のまわりをぐるっと囲みました。「自分は自分」という懸命なものをRに感じて、私ははたと立ち止まりました。

数日後、Rはティッシュペーパーの箱をかたわらに置き、ほんのちよつとの移動でも、その都度「あつ、あれは……」とその箱を気にしながら遊んでいました。

このとき、Rは私と会うなり、前日のことを話してくれました。それは、初めて抜けた歯のことでした。

Rの抜けそうな前歯に、おとうさんが糸をかけたこと。「いやだ、いやだ」と騒ぐうちに、おかあさんが持っていた糸先がRの歯を引っばる形となつて、あつという間に抜けてしまったこと。

「それで、抜けたとき、どんな気持ちだった？」と聞く私に、「痛くなかつた。スツとした」とRは言い、歯の話はそれでおしまいになりました。ですから、絶えず自分のそばに置こうとしている箱の中に、いったい何が入っているのか——それを聞き出すまで、その箱の中のものごまかさかRの歯だとは思いませんでした。

しかし考えてみれば、Rにとってその歯は、抜け落ちるまでは自分の体であつたもの、そばに置いていて不思議はない気がしました。Rはそれを四日ほど大切に持ち

歩き、家族の誰にもさわらせなかったといいます。そのうち、置き忘れてなくしてしまったようでした。

自分の一部にこれだけこだわりをもったRを、私はこの子らしいと思いました。そして、自分をこのようにして大事に確かめていく子どもの心持ちに、なぜかなつかしいような思いがよぎったものでした。

冬休み明け、Rはまた積木でおうちを作り始めました。この日はもうひとり仲間がいて「お店にしようか」などと楽しげでした。一応囲いができる、Rは真中に一つ積木を置き、「ここに座ってて」と私を招き入れました。

このとき、Mはまたビー玉ころがしをやっています。ところがRのおうちを見ると、ビー玉よりはおうちで遊びなくなったらしく、「その積木、貸して」とRに言いました。すると、Rはすぐさま「ビー玉くれたらね。その積木だけだったらいいよ」と、積木の一部とビー玉との交換を要求しました。

Rは、自分の持ち場で自分の遊びをつくりながらも、

望みのビー玉をこのときまで待っていました。これで、ひと月前のこの子のいらだちは、この子自身の手で解かれたことになりました。それを見とどけることができ、私は、「Rは大きくなったな」と思い、「やっぱりRだな」とも思いました。

一年を経て私がこの子にみたものは、自分のものへのこだわりが、単にこだわりが終わらなかったことでした。それは、自分は自分として、友だちは友だちとして、互いの間に「大事なものを認めていくものになったように思います。Rがそこで、悲しみやいらだちに揺れたことを、私は大事に胸に留めておこうと思います。

(長野幼稚園)

附 幼 村 ど ぜ う 騒 動 記



永 倉 み ゆ き

ある朝のひとときの会話から――

「先生、ぼくなに年生まれか」

「いぬどし」

「あつたりい」(当然あたるわけだが)

「ぼくは」「のぞみちゃんは」「あたしは」

その人ごとに、犬とかいのししとか答えると、「あつたりい」と嬉しそうである。その時、テーブルの向う側にいたともやが、隣にいたけいいちちに向かつて

「けいちゃん、ぼく、なに年か」

「……」

「あのね、きょうりゅうどし」(真面目に)

「ともやくん、きょうりゅうどしだって」

「すごい」

言った方も言われた方も、一体どこまで信じ、どこまでわかっていたのやら。

このような、半分ふざけたように聞こえるまじめな会話が、子どもといると、まともな会話の中に平気で割り込んで来る。次の一件も、嘘か誠か実に混沌とした中か

ら始まったのである。

☆

☆

朝。登園の早いゆうじは、その日も一番に来て、皆が揃う時刻には、日課である自転車で幼稚園一周を済ませると（彼の一日はこれで始まる）部屋の入り口から私に叫んだ。

「先生、先生、つりざお作って、つりざお。つりするんだから」

ちょうど物置きをのぞくと、いつかかききたちがつりごっこをした時に使ったつりざお（竹棒の先にタコ糸を結びつけたもの）があったので、はい、と渡すと、

「エサもつけてよ」との注文。私がいづもの調子で近くにあった発泡スチロールのかけらをつけようとすると、
「それでつれるわけないでしょう。どじょうつるんだからあ」

と、意外にも軽蔑した声でまともなことを言われてしまった。そうになると、こちらでも頭を切り替えなくてはならない。

「じゃあ、何ならいいの」

「パンだよ。パン。きのうにいくん（お兄ちゃん）がパンでつったの」

「パンか……。じゃあ、うさぎ小屋にあるかも知れないから行ってみてよ」

私は半分、面白そうだなと思いつつも、誰か他の子のために折り紙を折りつつ答える。きっと今頃ならうさぎ当番の先生がいて、パンくずをつけてくれるだろう。もしなければ——もしなくても——何か代わりのもの（葉っぱとかみみずとか、それらしいもの）をつけて満足してくれるだろう。後でちょっと見に行ってみようかな……。などと考えて部屋にいますと、ゆうじが駆け戻って来た。

「ないんだって。ねー、パンは、パンは」

今日に限ってやけに真剣である。

「ゆうじくん、どこでつるの」

「かわだよ、かわ」

「川って、うさぎ小屋の横の川のこと」

「あったりまえだよ」

その川とは、一昨年、その年の年長さん達が、砂場に作る川じゃなくて、本物の川を作ろうと、少しずつ掘って作った細長い溝で、川というよりは、大きな水たまりに近い。あそこにおたまじゃくしがいたのは見たことがあるが、いつも子ども達が自転車で平気で乗り入れ、石木その他を投げ込み、長ぐつでばしゃばしゃ通ったりするあの水たまりに、水の生き物が住んでいたとしたら奇跡と言っても良いのではないか……。とにかく「パン」と言い張るゆうじと共に、台所に行ったが、生憎こんな時に限ってパンどころかビスケットのかけらもない。どうしようかと冷蔵庫をのぞくと、運良く（か）職員がやったクリスマス会の際に、塩辛すぎて誰も食べられなかった干ダラの切れ端が目にとまった。

「あったあった。これはいい。ほら」と見せると、

「それで良いから貸して」と、ひったくるようにビニール袋を掴むと、ダダッと川の方に駆けて行った。いかにも早くしないと、どじょう

が逃げる、といった風である。見ると、いつも仲間のひろゆきも、いつの間にかつりざおを持って一緒に駆けて行く。このころになると、周りの子たちも、「なにしてんのか」「ほくにも作って」「はるかにも」「先生、作って」

の嵐である。思わぬ反響ぶりにびっくりしつ、つりざおを作るが、作っても作っても買ひ手は尽きず、十数本は作っただろうか。作りながら、私はちらっとあの川のことを頭に浮かべ、幻のどじょうのためにこんなに一生懸命汗を流してまでやることはないんじゃないか。もしこんなに必死で仕度をして、もしどじょうがいなかったら——もしどころか、始めからあそこにどじょうなんていないのだから——一体どうなるのだろう、と心配になる。

ところが行ってみて更におどろいた。たらいほどの広さの、川が一番深い部分に十人近くが集まってつり糸をたれているのである。その真剣な顔！ 私は一瞬、この一件は一体どう進展してどういう結末になるのだろう

と、まるで劇の観客であるかのように考えた。くり返すが、ここにはどじょうどころか、冬である今は、生き物一匹いないのである。まあいいやと心を決めると「先生、えさとれちゃった。つけて」の声に応じつつ見物を始めることにした。

しばらくそこで、エサをくくりつけたりからんだ糸をほどこいたりしていると、近くで遊んでいたきぐみ(年中)が、

「なにしてる」
と、バラバラ集まってきた。

「どじょうつってる」
と、得意になってあかぐみが答えると、意外にも「ふーん」と、寄って来る。きつと「いるわけないよー」とばかにされるだろうと思っていた私は、真面目な目付きで、

「先生、つれた」
と聞かれて、

「ううん、でも、いるのかなあ、ここに」と小さくモゴ

モゴ答えるが、誰の耳にも入らなかったらしい。そうこうしている間に、向こうからつりざおを持ったきぐみの男の子や女の子が息せききって走って来る。あつという間に小さな水たまり川のまわりはつり人たちでいっぱいになってしまった。

いつもなら、水たまりと見れば石を投げたり飛び込んだりする人たちが、やけに神妙な顔で並んでつり糸をたれている姿は何とも言えない。時折あおぐみさんが自転車を通りがかっては、

「何つってんの」
と聞いて、皆がどじょうと言うと「へエ」という顔で去って行く。

しかし、不思議なことに誰一人として「いるわけないよ」という子がいないのである。かれこれ二、三十分の間、ただ水面に糸をたれて、時々はつばがかるだけのことなのに、あきるでもなく「先生、つれないねえ」というばかりなのだ。たかがたらい程の水たまり、本当にどじょうを取るためならば、何も悠長につりざおを構

えなくても、網ですくってしまったえば良いのに、それも誰も言い出さないのだ。

ともひこは、

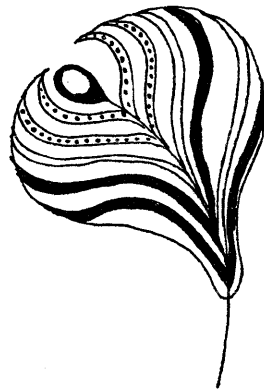
「どじょう、逃げちゃったんじゃないの。それとも隠れちゃったのかなあ」

と言う。もうちょっとなのになあ、という気持ちの込もった優しい小さな声で。

一番初めからいたゆうじとひろゆきと、つり好きのゆうじの兄の三人は、

「だめだよう、こんなに人がいちゃあ」

とプリプリしてどこかに行ってしまう。(後で知った事だが、三人は、これは本当に金魚のいる飼育小屋の池でつりを続けていた) ゆうじの兄のようすけまであんな風に言うということは、本当にどじょうがいるのかなあ、と、私までわからなくなり水たまり川をじっと見つめてしまう。砂場のカップや木片まで泥をかぶって埋まっているような木の葉だらけのこの川に、もしかしたら何かの拍子にどじょうが一匹紛れ込んだのかも知れない。い



や、きつとそうに違いない。またもや

「先生、つれないねえ」

の声。

「ほんとだねえ」

と、今度は私も一緒につり糸の先を見てしまふ。

その日は結局おやつまでの間に、誰もどじょうをつることができず、糸をからませたりエサのタラを付けかえたりしただけで、それぞれの部屋に帰って行った。しかし、誰一人ばかりにするものも、文句を言うものも、いやや疑うものすらいなかった。何のえものもなかったのに、不思議に充ち足りた気持ちだったのは、私も子ども達も一緒だったろうと思う。

子ども達が独自のアンテナと、^{ネットワー}連絡網を持っていて、何か面白そうなことが起こると、いつ知れ渡ったのかと思う程多くの子が集まってくるということは、普段の遊びでも、時々やる焼き芋でもわかっていた。しかしそれは、ほかほかのお芋や、目新しいものに魅かれてやって

来たのだと思っていたが、今日のどじょうつりの一件からそれだけではなかったのだと気付かされた。

子ども達は何かがあつたから集まったのではなく、何かがあり、そうだから、そのわくわくした雰囲気魅かれて集まったのである。つまり、ここにはどじょうがいるという何の確信もないのにも拘わらず、ここでどじょうがつけられたらいいなあ、という期待を一人一人が大切に支えたために最後まで、どじょうつりを楽しんでしまったのである。確かにもし本当につれたらまた違う楽しさが加わったのかもしれない。しかし、手元には何も残らなかったのに、期待に満ちた暖かな思いは、しっかり胸に残った。

こういう出来事に会う時、偉そうなことを言ってもやっぱり子どもだ、とは私は思わない。普段わかったような口をきいていても、やっぱり子どもはすごい。さすがは子どもだ！と感心してしまうのである。

(静岡大学附属幼稚園)

若いお母さんたちへ

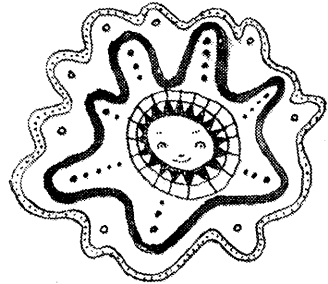
「はるにれの会」プレイルームのお母様

たちのメッセージ

今回は二年目の「はるにれの会」プレイルームに参加して下さいだったお母様二人に、最近感じたり思ったりしていらっしやることを書いて頂きました。

岸沢さんは、新しい町、清新町に引越されてから、子育てを通じてその地域になじんで行く様子を書かれています。大都會での子育て。その地域も御多分にもれず、入れ替りのかなりある不安定な社会のようです。しかしだからこそ、今を、今の関係を大切に育てて地域に根付いたものにしていきたいという願いが、行間に溢れています。

そして大沢さん。一家の精神的支え手だったお舅さんを亡くされた前後の様子を、御自分お仕事を辞められ、主婦に戻られた経緯とからませて書かれています。家庭と仕事、女が生きていくうえで、避けることのできないこの問題が、読み手に迫って来るように思わ



れます。

この五月、プレイルームは三年目を迎えます。月二回の集まりではありますが、子育ての時を大切に、その時だからこそ考えられることを皆で考え、深めてゆかれたらと思っています。そして子ども達が楽しく過ごせる場に出来たらと願っています。御一緒下さる方は非御一報下さいますように。

連絡先 03(466)0465 入江

新しい町で

岸 沢 藤 子

十月三十一日

「あっ、みつけた」「ほら、ここにもあった」「ぼうしばかりねえ」「草の中ようくさがしてごらん」

集めたドングリをポケットに入れるM子(二才三ヶ月)、しっかりビニール袋に集めるK子(三才四ヶ月)、私が見つけたドングリをいち早くもらいにくるS子(三

才五ヶ月)、拾っては落して執着しない我が子S(二才十一ヶ月)

S「ドングリコロコロ……」と歌い始め、大人も子供もそれに続いて歌い出す。小さな大合唱がお山にこだまする秋の一日、のどかな時間が流れてゆく。

私の住む町、清新町は、浅瀬を埋めたてて計画的に作られ、昭和五十八年から入居が始まったばかりの高層住宅地です。四階建てから二十三階建てまで高低をとりまぜ、公園や緑道もたつぷりととってあるとはいえ、自分の育った環境とかけ離れた街並みに、越してきた当時

は、こんなところで普通の子育てができるかしらと心配でした。

そして、その年の秋、我が家にも長男Sが誕生しました。

子供が生まれてみると、意外にここは、子供を育てやすいところに思えてきました。というのは、新しい町だけに、若い人が多く、子供にちょうどよい遊び友達が大勢いるのです。

晴れた日は、自然と公園に子供が集まってきました。町の中に大きな公園も四つあるのですが、近頃、私とSはもっぱら一番近くにある小さなお砂場公園に通っています。直径10m位の丸いお砂場の中にすべり台、ブランコ、雲梯などが点在し、そのぐるりにはベンチや椅子が並んでいます。さらにその後ろが小高い山になっていて、そこにドングリの木も五本立っています。そのうちの二本が、うれしいことに入居三年半たった今年初めて実をつけて、前述のドングリ拾いができるようになったのです。

ぽかぽかと暖かい日差しを受けて、子供たちは砂山を作り、三輪車で公園のぐるりを回り、小山を駆け上り、ブランコをこぐ。そうやって遊んでいるようすを見ると、ああ、こんなコンクリートに囲まれた町でも、あたりまえの子育てができるんだと、何だかほっとした気持ちになります。親の目の届く大きさと、近くに車道もないこの公園で、親も子もゆったりりのびのびとすごせるのは幸いなことです。

そうした今まで通りの子育ての一方で、たぶん昔と違うのは、母親達が自分のやりたいことを切り捨てずにやり始めていることではないでしょうか。私も友達二人を誘ってパン教室に通っていますが、Sは、仲良しのA子（二才十ヶ月）やY（二才十ヶ月）と遊び、母親三人はパンを習いとそれぞれが充実した時間をすごせるようになってきました。Sにとってもパンの先生の家は、目新しいおもちゃがあり、小学校・幼稚園に通うお兄ちゃんお姉ちゃんにも遊んでもらえる新鮮で楽しみな場所となってきました。

さらに、町にあるコミュニティー会館を中心にして、テニス、洋裁、あみものなどのサークルを、母親達が自主的に作り、運営し、そこで子供達は、ふだん遊ばない友達とも広く遊ぶ機会を得ています。二才代位になると、友達を求めぬ気持ちも強くなってくるせい、か、だいで母親から離れて遊べるようになってきます。ただ、母親も自分達のことになんか夢中になって子供に目が届かなくなる心配がだんだん出てきて、事故を起こさないように気を引きしめなくてはと思います。

雨の降る日は、仲の良い家に寄り集まってケーキやパンを焼いたり、子供のおもちやを手作りしたりと、一日があつという間に過ぎてゆきます。雨や雪の日でも傘なしでお互いの家を行き来できるのは、集合住宅の便利なところかしらと思ったりします。

このように晴れた日は公園が、雨の日は電話が、サークルが糸口となって家庭同志の交流ができ、孤独な子育てをしないですんでいます。重い扉一枚閉ざせば、没交渉で暮らすことも都会生活では可能なことだと思えます

が、外に向けて扉を開けて、家庭を開放的にしておけば、親も子も楽しく子育てができます。もし、子供がいなかったら、こうやって多くの人と友達になることも、あれこれ教え合うこともなかったら、子供がいるからこそ、人間関係が広がり、新しいことにも挑戦していけるのだと思います。

こうやって同じ年頃の子供達をみていると、自分の子供と同じことが他の子供にも同じ時期にあらわれて、人間の発達は共通しているものだなあと安心して子供の状態を見守れたり、男の子と女の子の違いが、育て方に関係なく現われてくるようで、そのことをみんなでおもしろがって子育てすることができそうです。

たとえば、おむつがとれてしばらくしてからのこと、SやYはやたらパンツにおしっこをちびるようになり、A子はおもらしをするようになって、これはどうしたのだらう、後戻りだらうかとみんな悩んでいました。そのうちに、これはどうも、おしっこをがまんできる限界に挑んでいるようだ気づいて「子供は親の考えをは

るかに越えたことを考えている」(A子の母親の言葉)と驚き合ったものです。こんな簡単なことも、はじめての子供を育てる私達にはなかなかわからずに、やっとおむつの洗濯がなくなったのに、一日にパンツを五枚も六枚も取り替えるのでは同じではないかと不満に思ったりしたのです。足踏みをし、足をこすり合わせてがまんしているSに、「おしっこじゃないの？」と問うと、絶対に「いや／＼」「だめっ／＼」の返事。「おしっこ」と言いかけて、「おしっ……り」と言っていてやっと笑う。私が「ああ、そう」と無関心を装うと、ようやく「おしっこ／＼」とトイレに駆け込んでいきます。「自分」は「自分の意志」で動くのであって「人の意志」で動くのではない……と、自律の時期は自我の成長、はじめる時期なのでしょうか。

こうやって、気のおけない仲間が近くにいて、子育てできるといえるのは、核家族の家庭では、本当に心強いものです。秋口、私に喘息の発作が起きた時、「Sちゃんあずかってあげるわ」と一日みてくれた人、Sを公園に

連れ出してくれた人、晩ごはんのさし入れをくださった人と子育て仲間がずいぶん助けられました。

この仲間も、いつ転勤があつて、引越していつてもうかもわからない不安定な都会の地域社会ですが、それだからといって利那的になるのではなく、ここを愛し育くんで、地域にしっかり根づいた子育てをしていきたいと願っています。

義父を失って

大沢啓子

昨年五月、私たち一家は、大黒柱である「おじいちゃん」を失った。この思い出は、私にとって今だ生々しく、とても文章になどならないことであるが、この原稿をおひきうけしたのを機会に、気持ちの整理をさせてい

ただくことにした。

当時、我家は義父（七十才）、夫（三十八才）、私（三十六才）、長女・茜（六才）、長男・亮（二才）の五人家族。義父の優しくまめな援助に支えられながら、夫婦共働きの忙しい生活を何とかこなしてきた。

暮れから体調をくずしていた義父が、一月末に入院。この日から、夫と夫の姉、私の三人が交代で病院に通うことになった。完全看護の病院なので毎日行く必要はないのだが、入院している義父の不安と寂しさを思うと、少しの間でも、顔を見るだけでもいいから行ってあげたかった。仕事を早退し、子ども達を連れてぞろぞろと病院へ行く。義父は、孫のくるのをとても楽しみに待っていて、ジュースや飴などを用意してしてくれた。二月に入り外科病棟へ移り、ようやく手術の日程が決まる。いざ手術となると、不安が大きいのしかかる。夫も義父も、神経がピリピリしていた。三月半ばに手術。結果は良くない。手のほどこしようもなく病巣が広がってい

た。術後の経過も悪く、三日間死線をさまよった。なんとか意識を取り戻したが、その後、寝たきりの状態が続き、そのまま死までの一ヶ月半を過す結果となった。

一番つらい思いをしたのが夫である。同じ家に住んでいながら、親の病気がつかなくなった事への後悔。親との別れは特別の寂しさであろう。手術の結果が悪かったこともあり、覚悟はしていたものの、死が現実となると、あれもこれもやってあげられたのではと後悔の連続であったようだ。葬儀も無事に終え、ほっとした所で眠れぬ夜が続いた。義父がいた時には、夫は二人の子の親でありながら、自分も子どもでいられる部分があった。

この家とは義父まかせで、気楽でいられた。これからは家族を守るといふ責任を果たさなければならぬ。「自分達がしっかりとした考えを持っていれば、まわりからいろいろ言われることはない」と言ったことがある。親という風よげがなくなり、世の中の空気が強い風のように思われたのか。三十八才で両親ともなくし、寂しい限りであるが、これをのり越え、両親から学んだ優しさと

真面目さを、今度は自分が親として子ども達に伝えていくことであろう。

子ども達も多くの経験をした。

長女・茜。生後八ヶ月から昨年三月まで、私の職場に近い、板橋区の西台保育園に通っていた。東京にもまだこんな所が残っていたのかと思う程の田園地帯で、茜は、畑や緑に囲まれた季節感豊かな自然環境の中でのんびりと育つことができた。ところが四月になり小学校の入学と同時に、生活は百八十度の転換。学校が終わると学童保育。五時以後は近所のお宅に二重保育をお願いした。友達もなく、初めての生活にどれだけ神経を使う毎日であったであろう。それに加えて義父の病氣、家の中は落ちつかない。茜は茜なりに、明るくふるまい、一人でよく頑張ってくれた。

遇然の事だが、茜は義父の臨終の時も立合った。これは敏感な茜にとって、非常に残酷な体験であった。葬儀の時には誰よりも泣いた。大好きだったおじいちゃんとの別れに泣いて泣いた。

茜は今でも家族の人数を数える時、おじいちゃんも仲間に入れる。義父は茜の心いつまでも生きています。

長男・亮。姉と同じ保育園の一寸児組に通っていた。

幼ない亮にとっても、この事態は異常に映っていたにちがいない。早朝から保育園に預けられたり、お迎えはお母さんではなく、板橋（実家）のおじいちゃん、板橋の実家で夕食を食べ、お母さんの帰りを待つ。四月からは、お姉ちゃんと離れ、一人で待つ生活に変わった。保育園の先生方、実家の両親や姉一家がとも協力してくれ、亮が不安のないようにと心がけてくれたおかげで、病氣もせず落ち着いて過ごせた。緊張した生活が一ヶ月続き、ついに水泡瘡でダウン。辛い軽くてすんだが、保育園は登園禁止。亮にも休養が必要だったのだろう。

亮にとっては訳も解らず過ぎた葬儀だったが、印象は強烈だった。特に火葬場での経験は二才の亮に「死」のイメージを強烈に焼きつけた。「おじいちゃん、やけどしたんだよ」やけどすることは、とてもこわいことだった。大好きなおじいちゃんに、もう会えない。

亮はよく仏壇の前でチンと鈴かねをならし、手を合わせる。遊びのように見えるが、あの中におじいちゃんがいることを知っている。

私も生活を変えた。十年間勤めた学童保育クラブの仕事を辞めた。結婚、二度の出産、育児と大変な時期をなんとかのり越え、仕事への欲もでてきただけに、そう簡単に決心のつく事ではなかった。病気の義父や夫や義姉のことを考えると辞めた方が良い。職場では上司や同僚が仕事を続けられるように協力し支えてくれた。なんとか頑張らなくては。夫は、先のない親のために私の生き方を変えてくれとは言わなかった。辞めるなら子どものために辞める。子どものためには辞めない。子ども達だって保育園で頑張っているのに……。それを今さら……。そんな事言ったら、今まで私が生きてきた事は何だったのか。辞めれば皆が楽になる。しかし、今辞めても私は義父のために何もしてあげれない。思いはぐるぐるまわりをするばかりであった。そして、幼稚園↓職場↓病院↓実家↓我家をまわる生活をすると続け、三週

間悩み続けて決心。それから一ヶ月後、休暇を使い果たしまわりに迷惑をかけたがらの退職となった。

義父の看病が一番ではあったが、これから先の家族を大切にしたいという気持ちは大きかった。このことで夫との信頼関係をこわしたくない、というのが本音かもしれない。

五月九日、退職後わずか九日で義父は亡くなった。私が十年間仕事を続けられたのは、義父の助けがとても大きかった。助けられるばかりで、とうとう何も助けてあげられなくてごめんさい。おとうさん……。

四十九日の納骨も終わり、これからが私達四人の新しい出発である。しかし心の方はまだまだスタートできない四人だった。何もしない、何もできない夫。家の中では何の役割もとろうとしない。全て私まかせである。全てをおしつけられた私も、生活感覚の変化による体の不調やいらいら。葬儀の後始末や子ども達の問題も重なり疲れがどっと出る。精神的にも肉体的にも最悪の状態で

あった。子ども達にも良い影響が出る訳がない。茜は再び喘息に苦しむ。私が仕事を辞めれば治るのではと思っ
ていただけにショックだった。亮は、お母さんと一緒に
いる生活に満足だった。でもうれしい事ばかりではな
い。三才のいたずら盛りで叱られる事も多い。今までよ
りお母さんと接する時間が長くなった分、叱られる場面
も多くなった。私の方も「又か」とうんざりする事が続
き、きつと怖い顔をしていたのだろう。何気なく亮と目
が合った時に「お母さん、亮クンのことおこっている
の？ おこらないで！」と言われた。何で叱られている
のがわからず、亮にはただお母さんの怖い顔ばかり目に
映った。

義父の死から九ヶ月。我家はようやく親子四人の生活
のペースをつかみ始めた。

夫は以前の会社人間にもどり、家では子ども達の良き
父親である。子ども達も落ち着きを取り戻した。亮は相
変わらずにはにかみ屋だが、ゆっくりと自分のペースで

生活の範囲を広げている。四人それぞれの思いのある一
年であった。家族が死ぬということは、子どもにとって
あまり経験することではない。この悲しみと頑張りを忘
れることなく成長してほしい。

私も子ども達に負けずに頑張ろう。仕事を辞めて手に
したこの貴重な時間。家族思いだった義父が私にくれた
贈り物として、家族のために大切に使おう。そうする事
により、義父の思いは孫である子ども達にひきつがれて
いくことであろう。

先日、友人から突然何年かぶりに電話がかかって来ました。彼女は、大学卒業後一年ほどで結婚し、今は幼稚園の年長組に通う男の子と今度幼稚園にある女の子の母親です。

「下の子が、今春から幼稚園で、手がからなくなるから、何か働きたいと思うの。あなたいろいろお仕事しているから何かないかしら」とのこと。

子供から離れることができる余裕ができ、再び何らかの形で、社会に出てゆきたいと思う心は、十分理解できます。しかし、そう簡単に今まで社会にろくに出入たことのない人を受け入れるスペースが社会にないのも確かです。

キャリアゼロ、しかし、年齢はかなり上。しかも、言うことは、しっかりしている人達。使う側にとっては、使いにくいというのが事実です。20代そこそこの女の子と同じつもりで、全く一から仕事に取り組んでゆくならいいのですが、あ

まりそういう意識はなく、手取り早くお金になる仕事。しかも、週三日ぐらいでわりと日給が良く、家族に迷惑のかわらないものを望んでいる人が多いようです。

三十半ば位になると、ずっと仕事をしていた人達は、それなりのポジションにあり、かなり高給を手にすることが出来ます。その人達とくらべて、パートぐらいしかなないと、不満を言う人もいます。

長い間キャリアを積んできた人は、それなりの苦労もし、今の地位を手に入れたのです。

友人には、長い眼で、将来やりたいことを見つけるように、十年かかって、十五年かかって、ひとつのことを積み上げてゆく努力をしてほしいと申しました。

人生は八十年です。四十になった所でまだ半分。四十までに、何か見つけられ、いいのではないかと思うのです。

幼児の教育 第八十六巻 第五号

五月号 ©

定価 四〇〇円

昭和六十二年四月二十五日 印刷

昭和六十二年五月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

©本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。



障害をもつ子の保育に 必要な配慮はなにか？

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ **全6巻**

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。このシリーズは、たんなる理論書や研究書でなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。



第1巻 自閉的な子どもと保育

第2巻 発達に遅れのある子どもと保育

第3巻 ことば・聞こえ・見ることの障害と保育

第4巻 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育

第5巻 心に問題をもつ子どもと保育

第6巻 障害児保育の基礎

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著

A5判・セットケース入り 各巻平均264頁 セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

元気な子どもの
室内遊具。

キンダートリムランド®

遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育むシステム遊具。単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩なバリエーションが可能なシステム遊具です。〈実用新案・意匠登録出願中〉

■特長

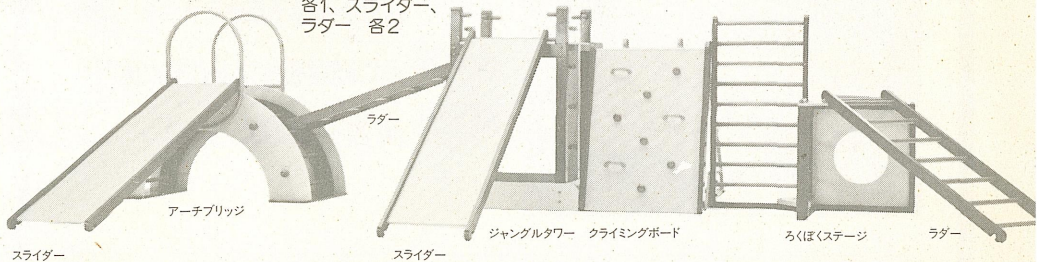
- それぞれの遊具は単体で遊ぶことももちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。

■生産物賠償責任保険付



総合セット
3025-10 ¥750,000

ジャングルタワー、
ろくぼくステージ、
アーチブリッジ、
クライミングボード、
各1、スライダー、
ラダー 各2



ジャングルタワー	ろくぼくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ¥170,000	3025-02 ¥150,000	3025-03 ¥170,000	3025-04 ¥150,000	3025-05 ¥37,000
●木製 ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製 ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製 ポリウレタン塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製 ポリウレタン塗装、 スチールパイプ 焼付塗装、 ビニロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	ラダー 3025-06 ¥23,000

くわしくはフリーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フリーベル館